
フェリとイタリの神隠し

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェリとイタリの神隠し

【Nコード】

N1082Z

【作者名】

Arthur

【あらすじ】

俺はトンネルをくぐった。その先には不思議の町があった。俺は、そこで少年と出会った。彼の名は。

アイツの名前。(前書き)

この作品はニコニコ動画sm9603265(フェリとイタリの神隠し)を読み、「そうだ。小説書こう。」と思い、書いたものです。文法めちやくちや、原作イメージと違う。などしょっちゅうです。しかもヘタとジブリのコラボです。その点をふまえてお読みください。無理と思った方はバック！バック！

アイツの名前。

麻屋店主、アーサーの部屋

「あーちゃー!!!」

麻屋最上階に位置する俺の部屋。その窓から、やけにあわてている妖精さんが入ってきた。

「ん・・・どうした？街の見回りは・・・」

やってきた妖精さんは担当制の街の見回り組の一員で、今日は見回りの担当だったからここにいるということは何か大変な事があったか、妖精さんがさぼっているかどちらかだ。後者はないと思うが、いうことは・・・

「!!! 何かあったのか!？」

俺はかなり大きな声で妖精さんに聞いた。

「しよれがね・・・ !!!」

妖精さんは早口に俺に説明した。

「なんだって!?! 異世界人がこの世界に入って来たああああ? ルートはどうした?! あいつだって今日は見回り番のはずだろ!!!」
ルートが来てから今まで、アイツが見回り番の時は全くと言っていいほど悪いことはなかったし、あったとしてもアイツがすぐになんとかしていたようだから、妖精さんがあわてて俺のところに来るなんてことなかった。

(しかも、異世界人が来たときに限って・・・!!! ルートは何をし
てるんだ ?!)

「君は・・・さっきの・・・!!! ねえ、ここはどこ!?!? どうしてここに!?! 君は一体・・・」

俺は少年にたくさん質問をしようとした。しかし、俺の言葉は少年の言葉に遮られた。

「今話している時間はない！今頃、アーサーが手下を使ってお前を探している！！早く立つんだ！！」

少年は俺の手を掴んだ。俺は少年の手を頼りに立とうとしたが足に力が入らない。俺が立てなさそうな事を感じ取ると少年は呪文を唱え始めた。

「In I hrem Testment im Namen der Wind und Wasser.よし、立て！」

少年は俺が答える前に走り出した。俺の足は意識していないのに勝手に動き、尋常ならざるスピードで街の路地裏を通り抜けていく。いつの間にもやら大通りの方に出てきていて、その時にはもう歩いていた。そして最初少年に会った建物へと向かっている。周りには遊覧船から降りてきたと思われる妖怪？たちや、建物の中で働いていると思われる人がたくさんいた。しかし、俺の事が見えないようである。みんな気にせず建物へ入っていったり、自分の仕事を続けている。橋の前に差し掛かる時、少年が息を止めるよう俺に指示をしたので俺は息を止めた。もうすぐ渡りきるところで・・・

「ルートヴィツヒさん！」

前に何やらこちらに向かってくる女の子がいた。

（かわいいんだけど！！息持たないから！！ちよつとどいてええええ！！！！）

しかし、俺は我慢も限界で息を止めてしまった。やばっ！俺はそう思いもう一度息を止め直したが間に合うはずもなく・・・女の子は俺を見て一瞬時が止まったかの様に言葉を失っていた。しばらくして「ルートヴィツヒさん・・・それ異世界人ですか・・・？今、中でえらい騒ぎになつとりましたよ・・・！」

女の子は目を見開いて少年に言った。

「っち！！ばれたか！イタリア！こっちだ！！」

少年は建物を囲む塀の下の方に付いていた小さなドアを開け、目に

も止まらぬ速さで俺を招き入れた。

扉をくぐると庭があつて、そこにある木の陰に隠れさせられた。

「ここにいれば、しばらくの間見つからない。いいか、騒ぎが収まったら裏のくぐり戸から出て階段を下れ。しばらく行くとボイラー室がある。そこにいるヤツに働かせてもらえるように頼むんだ。断られても粘りずよく頼め！辞めたいとか弱事をはくな！逃げるな！分かつたな！？」

そう言っている間に、建物の中から「ルートヴィツヒ様」と少年を呼ぶ声が聞こえた。少年はその場を立ち去ろうと建物の方を見た。すると彼についての疑問が……。

「ねえ！！俺、君に教えてほしいことが……！！君はどうして俺の名前を知ってるの！？君は俺のこと知ってるの！？」

少し安心したのだろうか。さっきまで気づかなかつた事が次々と頭に浮かんでくる。

「………。俺はお前の事を昔から知っているのだろうな。よく思い出せないのだが……。ああ。俺の名はルートヴィツヒ。ルートと呼んでくれて構わない。用はもう済んだか？なら失礼する。」
そう言つて彼は名前を呼んでいる人たちの所へと立ち去つた。

(ルートヴィツヒ……。ルート……。かあ……)

アイツの名前。(後書き)

2話です。読んでくださって本当にありがとうございます。今のところジブリの流れは変わりませんが、少しあとから全く違う感じになる予定です・・・同じだから見たくないという方はあとちょっと我慢してくださいね！無理強いはしませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1082z/>

フェリとイタリの神隠し

2011年12月4日00時48分発行